特別寄稿

# 世界定めの主体としての我

## ――全教科・領域に渡る児言態的視点――

宮田雅智

### 1. はじめに

前回の十八号の後半は「壺イメージ」という観点から「自分を器化していく」「新たな世界を定めるために適宜中身をカラにする」というのが主たる内容でした。

今回は「新たなもので満たしていく」ということについて「添加」という発想から教育全体のカリキュラムについて再確認をしようという内容です。

具体的には雑誌十七号に掲載した『「あれこれ」の中から育つ構えや活力・生命力～「重ね合わせ」という発想の獲得～』に書いたことをもとにして「世界定め」という視点から学校教育の全教科・領域の意味付けについて上原先生の言葉を紹介することを中心にして雑感という形で述べようというものです。

＊これまでの雑誌（記事）はこちらで閲覧できます。（広島大学　学術情報リポジトリ）

http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/journal/JidouGengoSeitaiKenkyu

学校教育全体が一人の人間の成長そのものに関わっていくというのは教育基本法などからしても当然了解済みの事であるはずなのですが、いまや「学力診断テストの順位」「受験」という現実のために重視される教科、それ以外はオマケというまるで進学塾のような発想を、行政の責任者までが学校現場に押し付ける世の中です。教育本来の理念は実際の学校や世間の間では完全に建前になってしまっているのが現状です。

さらに言えば家庭教師をしながら痛感している問題点が「理系・文系を分ける」という発想です。人間の成長に必要だから設定されたはずの教科・領域だったわけですからどの子にも学ぶ意味があるわけです。しかし受験に対してより効率的にという理由でなるべく早い段階から関係なさそうな教科は排除していこうとしてしまっています。制度としては高2からコース別にする学校が多いですが、少なからず教師の意識の中では小学校段階からそういう扱いです。

本気で全教科・領域がどのように個々人の成長や生き様とつながっているのか……特に教科担任制をとっている一部の小学校や、中学校以降の先生方にも是非考えてほしいというのが私の願いです。

私自身これまで、周囲から「児童の言語生態研究会」とは「国語という一教科、枝葉の部分の研究しかやっていないのだろう」と何度か言われたことがあります。そのたびに「言語生態」というように「生態」という言葉が入っていることを注目してほしいと言ってきたのですが、「言葉が生態をあらわす」という発想そのものがなかなか理解されません。日本語は母国語であるという大前提が失われ、外国語と同様の扱い……伝達の道具

……と考えられている限り話はいつまでも平行線でした。

〈上原語録〉

• みなさん、発想をもっと根本的に児言態風にしてください。……そのひとつは言語観ですよ。我々は『生態のひとつ』として言葉を捉えてきたんだろ。今の学校が堕落してしまったのは言葉を言葉として捉えてしまっているからだよ。（平成七年新年会）

• ぼくは決して諸君らに現場の国語教育の中に児言態風のものを入れていってください、なんて一度もいったことがない。児言態風しかやりようがないぜ、っていうことを僕は言いたいんだ。だから教材を教科書通りやったってかまわない。教科書通りやったってかまわないけれど、そのやり方はすべて児言態風である、っていうのが僕は子どもが一番楽しかろうと思うし、子どもが最も成長しやすいもんだって思うんでね。（昭和六十二年合宿）

＊上原先生は「私の国語教材研究は、言語観そのものがよそとは違うんです。」と繰り返し説かれていました。それは国語学者時枝誠記博士の「言語過程説」に立っているということでした。

## 2. 母国語としての語彙

「添加」について述べる前に「母国語」ということについてはっきりとさせておきたいと思います。母国語を獲得する過程でのそれぞれの子ども達の語彙発達は「テスト対策としての国語」などとは全く違う次元の話です。

ここで言語観に関する上原先生の言葉を拾い上げてみます。「外国語教育」「情報教育」に関しての言葉も多めに載せました。現代の主流とは真逆の主張ですが、母国語獲得について裏表関係にあるので是非ご一考下さい。

〈上原語録〉

• 言葉は『履歴書』です。『人生の糸紡ぎ』そのものです。（児童言語）

• 「言葉を教える事は、感覚を教えることだ」ってことに絞っておかなくちゃいけない。（平成四年合宿）

• 名前として言葉を覚えさせるのではないんですよ。本当の『言葉』に震えさせるんです。『言葉』っていうのは「ことのハ」で、『刃』『歯』『端』……で、ものの先端。その人が言ったことの『ハ』に触れる、その時にピリピリする感性が豊かになるのが言葉の発達です。意味として「我々が感ずるもの」は『意識』、「私でも感じられる」というのが『生きる喜び』なんですよ。そういうふうに、子どもの魂をふり動かしてやるんです。

言葉に向かおうとする『気分』『段階』が問題なんです。それが感情教育ですよ。言葉に命を与えることが人間教育です。（国語教材）

• 「言葉の意味」とは言語主体の把握の仕方であり、それが『その子の生き方』と関わってくる。これが国語教育の原点です。……

国語の基礎能力とは感情教育です。……今までの国語は多くが「言語作業のうちの一分野のみ」で行われていたから、子どもには面白くなかったんですよ。

今日の国語教育は「心」を問題としていない。答えが合うか合わぬかよりも「間違えて捉えた心が子どもにあった」と捉えるべき。何故、そう答えたのか、を聞いてあげるんです。（国語教材）

• 小学校の教育は「語彙教育」でなければならないんだ、ってことは。これはもう間違いないことなんですよ。それは単に「言葉を沢山覚えることである」っていうことだ

けを考えているわけではないんです。
（平成四年合宿）

・語彙っていうのは、一つの仕組みなのよ。語彙が集まるべく構造を持ってるわけ。だから昨日も話した。小原國芳先生が「子どもはコンペイトウだ」という。この子のコンペイトウはこの辺が欠けている、という事なんだよ。それは、語彙は「構造」だから。

児言態では語彙というものを非常に真剣に考えている。語彙っていうのは広がりがあるんだから。「針ねずみ」だって。つまり、核をつかまえると針が出ざるを得ない様な所を押さえる、っていう事なんでしょ。
（平成三年合宿）

・「三歳からの英語」なんていうのも、そりゃ子どもはやってのけるとは思いますよ。でも人格は歪みますよ。人間は機械ではないのです。語学、母国語の習得によって人間形成が起こるから問題なのです。
（国語教材）

・ずっと「幼・小では外国語をやるな。音声体系が崩れるから。」って言っているのはね、外国語っていうのは『顕在世界』だろ。音声体系は『潜在世界』だろ。幼い頃は日本人としての言語情緒を整えることが第一歩なのに、顕在の言語にしてしまうんですよ。言葉は覚えるもの、って……
（平成四年五月例会）

・日本語の本来性を忘れてしまったからみんな苦労しているわけでしょう。かつての日本人が持っていた日本語であれば日本語にピッタリくるものを、ことさらに変な『言語伝達である』とかいうような概念が入ってきたために起こっているんだろうと思うのね。

そして情報社会とか言い出しただろう。かつて日本人には情報社会なんていう考え方はなかったもの。あるわけないもんね。日本人の言語観って言霊観でしょ。その言霊を失ってしまったんだから。
（平成三年合宿）

・だいたいね「情報教育をしましょう」なんていうのは子供にとってはえらく迷惑な発想だと僕は思うよ。原始人っていうか、昔の人間は情報を知らなかったから生き生きしていたんだもん。（平成七年二月例会）

各教科での「用語」（語彙）も同様の発想でとらえる必要があると思います。それゆえ「知識・理解」での「理解」があまりにも軽視されていることは大問題です。

## 3. 人間教育だったはずの全教科・領域

形の上では「国語」と銘打っていない場合であっても、教育活動が言葉で行われる限り児言態的な国語の授業の発想がそのまま生かされると考えています。

一例として、十八号に掲載した文との「思考・構え」関連で「算数教育」に関しての上原先生の言葉を紹介します。

〈上原語録〉

・児言態っていうのはね、ぼくは算数の研究授業をやってもいいと思っているんだよ。社会でやってもいい。何をやってくれたっていいと思う。だって言葉でやるわけでしょう。だから何をやっても僕は言語生態だと思うね。
（昭和六十二年合宿）

・分数の計算が出来たか、出来なかったか、なんていうのではなくてね、そんなことよりも『思考形態が頭の中に出来たか否か』が問題ですよ。

「わからせる授業」ではなくて『人類のもつ思考体系を組織化する授業』ですよ。……おおざっぱに三つに分けて言えば

■人間の思考体系

■感情構造
■社会性
っていう三つの柱の調和じゃないですか？
（昭和六二年六月例会）

上原先生のこれらの発言をもう少し丁寧に考えると「人間の意識」をどうとらえるかという問題と関わります。教育活動すべてが「意識発達の刺激剤である」という考え方です。

〈上原語録〉

・『意識は発達する』もの。子どもは自由に意識できると思ってはいけない。また、ある程度の年齢になれば自然に意識できるようになると思ってもいけない。だから子どもによって偏るんです。（児童言語）

・技能教育でなく『意識発達』を問題にしなければダメです。それは「教科の枠内だけで可能か」というと出来ないんです。子どもは、無意識界がほとんどなんです。なのに授業は「意識的活動」ばかりやっているんです。

教育は、絶対「子どもの日常生活」と結び付かなければなりませんよ。（国語教材）

・「教科書」について……言葉は感覚・感情などと結び付いている。「視」「聴」「触」あと広い意味で「気配」なども含まれるでしょうね。それを忘れてはいけませんよ。

そして、教科書でこれらの感覚の何を刺激するのか考えていくのが基礎ですよ。その具体的な活動が「思考」「感情」「構え」「言語作業」の四つとなるんです。
（国語教材）

・他の教科の教科書を子どもはどう反応して読もうとするのか……「理科的な文章」「数理的な文章」なんてあるわけでしょ。そうした文章への構えも開いてやらんとね。それには、どの扉が開いているのかみていかないとね。
（平成五年五月例会）

・子どもが何に誘惑されて、何にリードされて生きているか・・それを表すほど「子どもらしい」と感じるんですよ。表さない子、知識で動いている子は子どもらしいと感じないんです。子どものエネルギー、生命の誘導性が活力なんですよ。これは大人だって同じなんですがね。（平成二年合宿）

・子どもっていうのは、やっぱり何にも教えなくてもいいんだ、それよりも子どもにごく自然な形で接近して、接近していけば子ども達は必ず「自分達がどうしなければならないのか」という事を、そして「何を考えなければならない」ということを考えていく。
（昭和六十三年合宿）

先生は「小学校段階」と「中学校以降の段階」を明確に線引きしています。もちろん子ども達には個人差がありますから、小学生でも中学生向きの指導、中学生であっても小学生向きの指導が必要な場合があります。

それは補習という意味合いだけではありません。高校生で数学が得意だという生徒に対しても、必要に応じて算数の考え方を復習しました。本当は小学校の段階で丁寧に耕されていなければならない事項がテスト対策への合理的指導の名のもとにほとんど扱われていないからです。それを補強すると仮に大学受験のための数学であっても飛躍的に伸び方がかわりました。

余談ですが、教え子のＫＯＵ君と松下村塾など江戸時代の教育について語り合った時に、カリキュラムが統一されていなかったからこその利点もあったのではないか、という話が出ました。様々なスタイルの学問の場があり、それらがうまく共存共栄したからこそ、多様な人材が組み合わされて個人ではなしえないような大きな力を集団として発揮できたのではないかというやりとりでした。

〈上原語録〉

・『人間の精神の遍歴』っていう、それの原則的な物が小学校のカリキュラムの中に入ってこなくちゃウソだって言ったろ。

だけれども中学校課程になるとこんな事言ってられないのよ、やっぱり。この世の中で生きていく為に沢山の事を覚えていかなくちゃいけない。教えとかなくちゃいかん、ということになるからね。知識体系がバーッと出てくるに決まっているんですよ。

ところが小学校はそんなことしなくてもいいと僕は思っている。それよりも『人間としての形・心』そういうものをきちっと押さえてやる。だから、こんなに素晴らしい職場っていうか仕事っていうのはないんだから。

まあ、小学校と中学校では線を分けよう。線を切らなきゃ。（平成四年合宿）

・八教科あるからそれを何とかやっとれば何とか済んでいる、なんていう甘い考え方じゃいけないんで、むしろ教科っていうのを僕はもう一度考え直さなきゃいけないと思う。

あの教科で一体どれだけの事が人間成長に役立つのか、人間の作り上げていった科学にどれだけ順応しているのか、そういう考えを少なくとも中学校の先生方は知識体系を片方に持っていて、そしてそれでやるわけだから、また中学校の段階だからそれでいいと思うけれど、小学校だけはもっと人間を探さなきゃいけないと思う。

人間の成長の在り方というものを探す事に喜びを感じなくちゃ。それが一番楽しい事だと思うのね。人間はかくして大人に近付いていくんだ、っていうようなところを探してやる、っていう。そういうことが一番大切な事だと思う。（昭和六十二年合宿）

・小学校教育は『ナマ』でなくちゃダメなんだよ。ナマでないと日常性から離れてるって事なんだから。……子どもはナマなんだもの。生き物なんだからね。

（平成三年合宿）

・小学校では文学教育はやる必要ない。中学ではやる必要がある。知識教育が中学校ではある程度必要だから。でも小学校では知識教育はいらない。人間が活力を失ってしまう。

（平成六年合宿）

## 4. 授　業

上原先生（児言態）の授業に対する考え方は、今の世の中の常識とずれているように思われてしまいます。でも先ほども少しふれましたが、世間が大切にしている「得点力」を本気で伸ばしたかったら尚更児言態の授業の考え方が一番確実であり早道であると、この二十年あまりの家庭教師生活を通して感じています。

〈上原語録〉

・今までとは違う言葉の世界、意識の世界に住み替えさせるのが授業だよ。だから授業ではいつも子どもには限界に挑戦させるんだよ。

ただ無理にひっぱりあげさせるというのではありませんよ。『こんにちただ今の限界』を見極める、子供達がその限界をこのように突破していく、そういうことをつかまえて示していってやるのが授業ですよ。

（平成四年忘年会）

・人間は「構え」の『崩壊と構築』を繰り返して成長していくんです。授業なんかで自分の「今の構え」に気が付いたら、それはもう「古い構え」なんですよ。もう「新しい構え」を構築する時期なんです。

（平成七年二月例会）

・授業では教えてはいけないんです。ただ知識を入れるだけになってしまうから……。

子供がどんな事を話すか聞いていればいいんですよ。ようするに子供の意見の交通整理をしてやればいいんですよ。（この『意見の交通整理』が上原先生の口癖）

（国語教材）

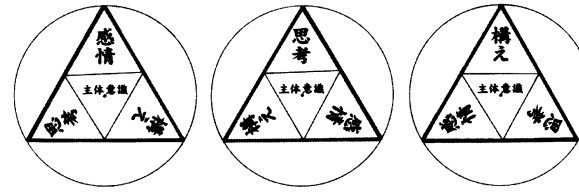
• 授業で子どもがナマの姿をそのまま出してくれればいいんですよ。子どもは本当はナマを出したくてウズウズしてるんだから。それが何らかの原因で出せなくなっているから苦しいしつまらなくなっているんだから。出せない原因を除きさってやる授業をしなさい。

（平成七年二月例会）

どの教科の授業であっても児言態が掲げている「思考・感情・構え・用具言語」が関わってくるというのは先述した通りです。当然のことながら他の柱や、授業以外での様々な事柄とも関わり合っています。

それを図式化したのがこの図です。回転軸の中心にある「主体意識」が「世界定め」の主体意識ともつながっていきます。これを回転させるエネルギーが生命力そのものなのですが、その根源は「感情」、別の言い方をすればイメージ運動によってますます発露されていくものです。

『授業（教育活動）＆日常生活の内面構造』




• 太線　用具言語（各種語彙）・・・各教科の知識も含む
• 回転力　野生　＝生命力（感情エネルギー）
• 円周の線　神性・・・集合的無意識の深い部分
• 正三角形 内部　意識世界
• 正三角形 外部　無意識の世界
• 全体の相互作用が意識世界の中で具象化したものが「イメージ運動」
• 外界との境界　感覚（感性・情操・体感・身体感覚・臓器感覚）

☆見方をかえれば、この図は、それぞれの人間の個性の違いを大別する図にもなりえます。

## 5. 類化性能と構造認識

上原先生の師匠でもある折口信夫先生がよく使われた言葉に「類化性能」というのがあります。一見すると関係なさそうな物事に共通性や関連を見出す力です。（それに対して、同じ様にみえる物事であっても、その差異を見出す力を「別化性能」と呼んでいます。）

上原先生は授業の大きな目的の一つが、この類化性能力の向上であるとしていました。

〈上原語録〉

• バラバラの物に脈絡をつける能力が大切。自分のイメージを捨てないで物を考える習慣をつけ、どこにも結び付けようとすることが脳の働きをアップさせることにもなる。『虫の知らせ』とか『胸騒ぎ』っていうのも、偶然ではなくて結び付ける何かがあるのだろうと捉える力だよ。

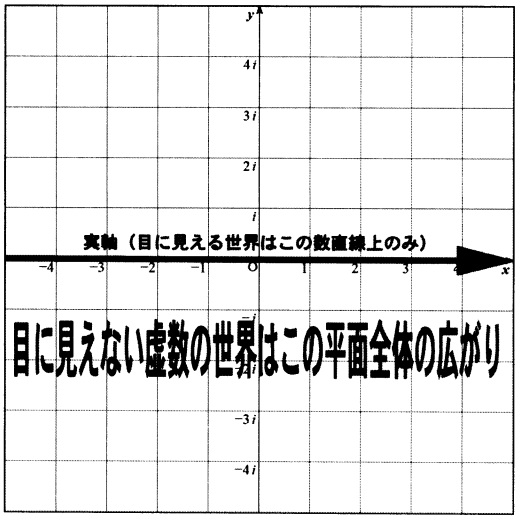
（平成六年新年会）

そこで鍵をにぎるのが「抽象化・記号化・図式化」などによる「構造認識」です。

一例として「虚数の世界」をあげておきます。数の概念と人間の世界認識とは呼応関係にあります。西洋では神の存在や世界を認めながらも、現実生活では「ない物はないのだ。数えられないのだから数字を用意する必要もない」という理由で「0」や「負の数」はつい二百年ほど前までは認められていない数だったそうです。対して日本人はこの見える世界の本質は見えない世界にあるという世界観です。

近代になって西洋で「虚数」というものが導

入され、やがて虚数を複素平面という座標に表記することが考案されました。このような座標の図になります。これをみると「言葉はことのハ」としてきた日本人の感覚が数学的な構造図として示されたような気になります。




＊「虚数」は英語では imaginary number つまり想像上の数　とされていました。しかし、その後物理学の方面で虚数なしには説明できないことがいくつも発見されて、今では虚数こそが本質であると言い切る学者も増えているそうです。（参考文献「虚数の情緒―中学生からの全方位独学法」吉田武著　東海大学出版会）

＊上原先生の師匠である郡司正勝先生の著書「風流の図像誌」（三省堂　郡司正勝刪定集構第六巻にも収録）は構造認識が「心意伝承」という人間の根源をとらえることにも関わっていることを示す内容です。

〈上原語録〉

・日本人はすべてが具象なんです。だから日本の子ども達が世界中で最も優秀であるというのは理由がよくわかったでしょう。無理していないんです。「抽象から入る。無理やり入れさす。」なんてしていない、っていうことです。全てが具象から入る。

（西洋の考え方にそまっている現代人は）「具象があったら抽象がある」って、こういうふうに二つに分けて考えて、対立してしまう。

日本人の抽象っていうのは、そうじゃないんです。具象の中に抽象を見つけ出す。一番簡単な例を言うならば、日本人のそれぞれのうちが持っている家紋ですよ。家紋は皆、抽象ですよ。但し、抽象から抽象を見つけ出しているんではないんですよ。みんな具象から抽象へ入っていく。

（平成五年合宿）

・子どもにとって『記号』とはそもそも何か……人間にとって『記号化する』とはどうしてか。これが人間生活なんでしょ。人間の共通項である「感覚・感情」の耕しが出来ていて、その上で『記号』の約束事が入るんだよ。

（平成五年五月例会）

幼い子どもが「感情移入」できるのにも、和歌の技巧にも、あるいは日本人の描く「擬人化イラスト」が世界的にみて特別視されるのにも「抽象化」能力が根底にあります。

「言葉遊び」「比喩」「ことわざ」等々もそうした能力を高めるために大きな役割を果たしてきたといえるのですが、そういった感覚に対しても子ども達が鈍感になっているというのを強く感じています。

## 6．「添加」と「図式化」と「世界定め」

数学の世界での「添加」という使われ方を知ったのは数学の啓蒙書である「数学ガール」というシリーズの「ガロア理論編」です。（結城浩著　ソフトバンク クリエイティブ）

ちなみに今回は触れられませんが同じこの中で扱われている「群論」「構造」「虚数・複素平面」「線型空間」「次元」なども、「世界定め」や「意識の転換」などの児言態的発想と関連してしばしば大学生のＫＯＵ君と話題にしていました。

ここでいう「添加」とはごく簡単にいえば「ある集合Ｓに、ｐという要素を一滴ポトン

と落とせば新しい集合Rできる。世界が一気に拡張する」というようなことです。

数学に限らずこうした添加によって意識世界を拡張していこうとする姿勢が浮き彫りになるのではないかということでKOU君が考えた数学的課題を国語的にアレンジして私も何人かに試してみました。

集合を表す円の中に「いちご・バナナ」などと書き込み、「この集合の中に他にどんな言葉が入ると思う?」と問います。ほとんどの場合、果物の名前を答えます。ここで「他にこういう集合とも名付けられないかな?」と問うてもなかなか思いつけません。「食べ物なんて言ったら広くなりすぎるかな……」という発言もありました。もしも「食べ物」とすれば「果物」とした以上に入れられる要素の範囲はずっと広がるわけですが、思い込み・決めつけによって範囲を自ら狭めてしまっているわけです。

ここで「実はこの集合の中にはこんなのも入れられるんだ」と言いながら円の中に「エンピツ」などと書き込み「じゃあこれはどういう集合と言える?」と問うと「そんなの入るわけないよ!」と拒絶する反応が多く出ました。その中で少数ですが「えっ?それじゃあ『物』?」という意見がでました。「そうそう。最初から『物の集合』って考えたって良かったわけでしょ。果物って決めつけなければ一気に世界が広がるわけだよ」と助言すると、自分を自分自身が縛り付けているというのがどういうことかに気づいたようで「それなら『この世界にあるもの』って言えば「生き物」だって入れていいんだ。……『元素で出来ているもの』って言えば「宇宙」だって入るんだ!」という具合に次々と世界を拡張しながら盛り上がっていました。

このように「思い込み」「決めつけ」などで自らを縛る構えを無意識にしている、そこからなかなか自分を解放できないということに気が付けた、その上で「解放する」ということが自分の世界を広げていくというのがどういうことなのかを感じ取れた……そのことに自分で気づけていけたことは「世界定めのための主体的な姿勢」に目覚めていく上で大切だったと思います。

教科、領域、あるいは子ども達の日常生活のすべてが「添加」としての一滴になり得ます。「何が、どう、つながっているか」という受けとめ方次第によっては格段に意識世界を変革し、広げてくれます。

「自分には関係ない・必要ない・無駄」と決めつけさえしなければ、まさにこの世の中に不必要な存在も出来事もなくなっていきます。

仏教で「縁」というのが重視されてきたのは、そういう意味合いもあったからなのではないでしょうか。

もともとKOU君が考えた「添加課題」は「数」を素材にしたものでした。集合円の中に「2・6・12」などと書いて提示します。ほとんどの場合「偶数の集合」ととらえて「4」や「8」などと答えます。これに「3」や「小数」などを添加すると拒絶反応が少なからず起きます。しかし仮にもしこれが小学校の低学年だったらどうでしょうか。ごく自然に「1」などとも答えると思います。「偶数」という言葉を知らない分、縛りがないわけです。

これは前回紹介した「壺イメージ」の成長による変化にも通じることです。

若者たちとの語り合いでは、旧約聖書でアダムとイブが知恵の木の実を食べた為に楽園を追放された、というのにはこういった意味合いもあったのではないか、というような意見がでました。そういう意味では日々獲得している「言葉」というものは「諸刃の刃」です。同じ言葉が世界を広げることにも、余計に狭めてしまうことにもつながります。

同様に「もう分かっている」という意識も添加がより有効に働く上で邪魔になります。

上原先生は「停滞からの脱出」ということに対して「トランスフォーメーション」(意識の転換)ということを強調しているのです

が、ここで重要なのは「ある種の絶望感」だと考えられます。今までの事が通用しない、という意識が強い時ほど本気で新たな、小手先ではない根本的な打開策を模索するわけですから。父の影響でたびたび私が引用する日本神話での「黄泉の国→禊→三神の誕生」はまさにそうした流れの象徴です。

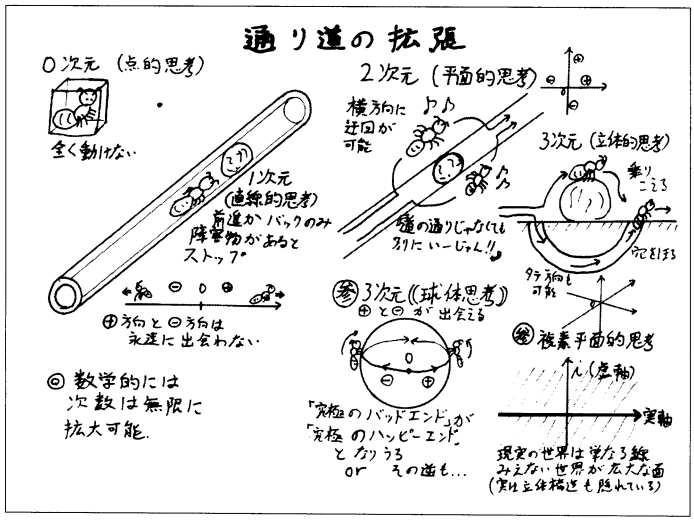
「絶望感」に類することで上原先生は「諦め」ということに関して「日本人の意識では明らかにする、究極の真相を知る、ということ。」と述べています。

添加による拡張をより可能にする上で「今の自分」の「ものの見方・考え方」というのを構造的にとらえることは不可欠です。

図式などによって構造的にとらえると類化性能が働きやすくなるということは前節でも述べました。それは「抽象化」「論理化」ということによって「個々人の感情やイメージから切り離された状態」になる、自分を自ら縛ってきた「当たり前」から解放されやすくなるからです。だから新たな因果関係の自分の意識世界の中で構築し、自ら世界広げていく上で極めて有効なのです。

先日KOU君が「イメージ運動が途切れてしまって、また動き出すまでの空白の部分って、単に何もないのではなくて、そういう時期だからこそ添加を起こしていくためのいろいろな知識や考え方を受け入れることが可能な時期だと思うんですよ」と話していたのですが、まさにそういうことです。

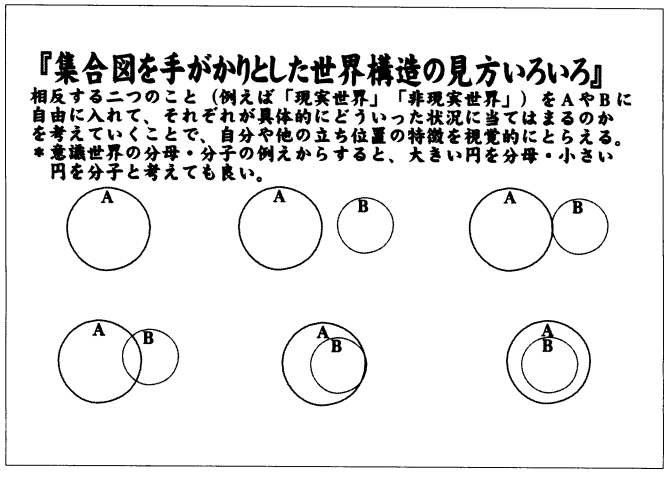
十八号の中で次元の違いによる思考分類について触れましたが、行く手に障害があった場合の乗り越え方という事例でそれを図式化してみたのがこれです。より深い無意識に通じる事ほど常識的な現実は大きな壁として立ちはだかります。それを発想の次元をあげることで乗り越えようとするわけです。




図式には「器」（壺）のような吸引作用もあります。「図に導かれる」感覚です。

先日もちょうどお彼岸の時期だったので、次の図を手掛かりに「あの世とこの世」について若者たちと語り合ったのですが、どの位置関係の場合だったら、どういうことに当てはまりそうだ、ということで活発なやりとりができました。

密教で用いられてきたマンダラはその作用を究極的に利用したものなのかもしれません。



くりかえしになりますが「言葉」にはどうしても「個々人の感情・イメージ」が伴います。自分の感覚に素直な子ほど、そこから解放されるのは容易なことではありません。

そうした子どもたちには「言葉による添加」よりも「図式構造による添加」の方が有効です。（数式化も含みます）自分の思い込みなどにとらわれないので意識世界に添加として受け入れられやすいのです。十八号の古典芸能の節に書いたような「器化」ということを数学の力を借りて行うわけです。

**〈上原語録〉**

・いろいろな人の意見を聞いて「あっ、こんな考えもあったのか。」と『考えの向き』に気が付く事がある。この「向き」が『構え』なんです。話し合いなんかしていても、「○○の意見に」とするのではなく「みんな必要」という姿勢、『構え』を持てる子が「心の広い子ども」なんですよ。

ものの「見方・考え方」の方向が『構え』ですが、「誰の物の見方・考え方」という前に「人間の」ということが必要なんです。中身よりも、先ず「人間としてのパターン」から外れないことです。この世で生きていく上での身構え方を、構えの指導で扱うことも教育では不可欠なんです。

（国語教材研究）

もちろんだからといって感情を伴う言葉を使う事を否定しているわけではありません。時と場合によって使い分けることです。ちなみにKOU君は「算数っていう言い方を昔のように算術にした方がいいのではないか。その方が『術』という言葉にワクワク感が伴って『魔法の世界』に通じるような好奇心がわくのではないかと思うんですよね。」という見解を持っています。

もう一つ「添加」に関する彼の言葉を紹介します。

**「集合が要素を選ぶのではなく、要素が集合を作っているのではないか」**

まさに「世界定めの主体性」に通じる言葉です。

**〈上原語録〉**

授業では『体制の入れ替え』をやるんだよ。同じ勉強をしたって今までとの考え方の違いに「気がついた子」と「気がつかない子」がいるんだろ。だから算数なんかが苦手な子と得意な子にわかれるんだろ。「わからない」っていうのは『頭の使い方が違うだけなんだよ』って。遊びのルールのようなものとして扱ってやるんですよ。

だいたい先生らは言葉で説明をしすぎるんじゃないかな。言葉だと必ず子供は自分のイメージを追いかけだしますよ。それで「変だな……ボクの思ってることと違うな」っていつまでも悩むんですよ。数字で扱うと余計なイメージと切り離せるんですよ。算数なんかで子供にとって不可解なことを『やくそく』としてスッキリさせてやることだよ。

どうしたって子供は自分のイメージの中でしか勉強できないんだから……だからそれとずれた事を教える時には『約束事』という考え方があることを指導してやるんだよ。

（平成六年四月例会）

## 7．「英才児の生き様」と子ども本来の力

上原先生が注目し続けていたことの一つに「英才児」と呼ばれる子ども達がいます。それは英才児の生き様が人間成長の理想的なモデルの一つを示してくれているのではないか……つまり英才児が無意識に通過してしまっている中学年以降の壁の乗り換え方（方法という意味ではなく構えという意味です）をヒントとして、一般の子ども達への教育を考えようということです。

英才児はこうした分母・分子を自由自在に入れ替えるというのを自然に獲得してしまう特徴があるといいます。世間的には早い段階から夢の世界など卒業し、捨ててしまっているから優秀なのであろうと思われがちです

が、実際にはいつまでも夢の世界をベースに生き続けているということです。

〈上原語録〉

• 英才児とは優等生っていうのとは違うね。優等生っていうのは集団への躾で大脳を使ってしまう。英才児はそんな事には大脳を使わないんだ。自分の夢をもたせる世界を作ることに大脳を働かせるんです。集団生活を意識するよりも、個人を充実させる時間を沢山持つんですよ。自分の世界の子なんです。（昭和六十二年十月例会）

• 誰でも自分の世界を持っているのに、余計なことを気にしてそれを捨ててしまう。英才児っていうのは、それを誰かの為に変えようとは思わないんだよ。（平成四年五月例会）

• 簡単に言うと英才児の条件というのはさ、それはもう絶対的に『素直』じゃなくちゃ。素直さのないようなのは、英才児からはずれてしまっている。根本的な条件が整っていないと思うな。（平成七年合宿）

（注　ここでいう「素直」は一般的に考えられがちな「大人に服従」という意味ではありません。文字通り「自分の素」に「直につながっている」という意味です）

現代のような「競争原理」「成果主義」に追いまくられている子どもたちは、常に「もう分かっているから大丈夫」という反応を要求されています。優等生と評価されるほど「自分の中は一杯に満たされた状態である」と示し続けなければなりません。それは「いつ負け組として切り捨てられてしまうか」という恐怖感でいっぱいだということと裏腹です。だから考え方や構造を理解しようともしないで何でも丸暗記しようとします。時間をかけないと分からないようなことに対しては拒絶する子どもたちばかりが増えています。

そんな風ですから「人類にはまだまだ未知の分野、人知を超えた領域があり、それらを探求しつづけられる喜びがある」などという発想にはとてもなれません。

自分の中にまだまだ伸びしろがあるという事に気が付いてほしくてこちらが働きかけようとすると「この先生は、私が築いてきたものをぶち壊そうとしている。」「本当は分かっていないというのを暴露しようとしている。」ということで強い拒絶反応を起こされてしまうのが常でした。

逆にこれまでどんなに「学校の勉強が嫌い・苦手」という子どもでも、カラッポである今の自分はこれからカラであった分だけ注ぎ込めるんだ、という意識になって、興味・関心を示した瞬間から自他が驚くほどに急成長します。勉強とは「テスト対策・受験対策」「他から評価されるためのもの」というような意識や「丸暗記の勉強法が一番合理的」というような癖がない分、素直に「添加」を次々と受け入れるわけです。

実際に私は教え子のＫＯＵ君と共に平成二十九年に英才児のために設立された聖徳学園小学校を参観しました。本当にごく普通の日に伺って三年・五年・六年の数学の授業を参観しました。その様子について具体的に紹介するスペースもないので省略しますが、上原先生が述べられてきたことが実感できる場面の連続でした。一般に考えられている「進学校（塾）」の授業のイメージのような張り詰めた雰囲気ではありません。勿論集中している時にはシーンとしますが、競争が背景にあるような雰囲気ではないのです。

イメージ運動と思考が同時に発動している状態になると、それはそれは賑やかに自由な意見が飛び交っていました。友達の発言をどん欲に受け入れ、添加し、新しい世界を自分の中に次々と構築していました。

その活力たるや三年生などではノリと勢いのまま思わず立ち歩いてしまう児童もいたくらいでした。でも先生は自然な流れを尊重して立ち歩いても騒がしくなっても注意をするということはほとんどしません。（一度だけ

ビシッとさせたのは、友達の意見に対して頭から否定的なことばを口にしてしまった児童に対してでした。）

休み時間も私が過去に勤務した・参観した学校の中で、一番子どもっぽくはしゃいでいるような姿ばかりでした。

〈上原語録〉

・英才児は頭がくたびれない。頭の使い方がうまいんですよ。のりでやってしまうのね。次々にのることを知ってるんだね。頭が明るい。使っていっても陰りがこないんだよ。考えることが好きなんだね。今の子はすぐに「わかんない。」と言う。こう思うように教育がなってしまっているのね。「考える事は楽しい」じゃなくて「難しい」と思わされてるんだよ。

（平成二年十月例会）

・英才児の書く作文の特徴として、自分の感情そのものが表にたって感情説明をするってことがない。それがないから知的に発達するってことかもしれないが……。

情景が先に見える。自分の思いを書く時って情景から離れているでしょ。つまり主観である。ところが情景の方が強いんじゃないの。だから、こういう風に極めてきれいに状況・情景をだしている。……いわゆる凡人が持っているような自我意識がないからそうなるんじゃないかな、って気がするんです。

自分の頭の中に他人が入り込んでしまって『自分が何処へ行ったかわからない』っていうような状況には絶対ならない。ひょっとすると、英才児は非常に『個人』が発達しているって常識的に判断するけども、かえって個人なんかないんじゃないか、って気がするね。

（昭和六十二年合宿）

先生が「個人」という意識についてふれていますが、ここ何年も「自分探し」「自分をいかせる仕事」「アイデンティティーの確立」等々のことが盛んに言われています。前号でも触れましたが、家庭教師で進路や就職活動についての協力もしてきましたが、率直にいってそれは逆に若者たちを追いつめ、苦しめているように感じています。

## 8．おわりに「添加」に先立つ思考・知識

上原先生の「心意伝承の研究」でも「犠牲論」「恨み論」「殺しと血の心意伝承」などという言葉が登場します。日本神話や昔話にも神々の失敗や神様らしからぬ場面が次々と出てきます。そこからは古来より日本人は、重大な失敗をした者や悲運を味わった者ほど「貴重な経験を積んだ者、普通の人間には察知できない裏側を観る能力を獲得した者」というとらえ方だったことが分かります。晩年、先生は「馬・稚児・湿地帯」の関連についての研究に没頭されていたのですが、最近になって私も関心を抱いています。それも人知を超えた生き様への道だったんだという予感が得られています。

折口先生の著書では「道徳」を考察する材料として「任侠」などが取り上げられています。前回述べた伝統芸能の世界同様、古武術の世界でも、筋力にたよれなくなった高齢者の方が若者のパワーやスピードを遥かに上回れる。婚礼の衣装は「死に装束」という説がありますが、これまでの家のことを一切捨てて生活した後、やがて「おかみさん」としてその家の守護神のような存在になる……。

このように洋の東西を問わず、古典や伝統文化や習俗などの背景にある「ものの見方・考え方」には、現代人が信じて疑わない「常識」に反することがたくさんあります。

そうした相反することの統合という発想も、生涯というレベルで「添加」を最大限に生かす知恵だったのだと思います。

ちなみに最先端の自然科学・脳科学でも従来の常識を超越し、古来からの発想を裏づけるような成果が報告されています。

学校で学ぶこと、生活を通して得たこと……これら全てに世界定めを「より深く、また並行世界的に作っていける」ようにする上で、幼い頃からなじんでいることには大きな意味があります。

既に社会人となった教え子のノブ君が最近数か月にわたって入院しました。そんな彼の退院後の言葉でこの原稿をしめくくろうと思います。

『全て失った状況で、そのような中でさえも、幸福感を感じられていました。まず厳かに沈む夕日のように物事一つ一つに堂々と幕を下ろせることが、重要な部分であるのだと思います。いつまでも悔やんでも、後悔して過ごし続けていても同じように人生は過ぎ去っていってしまうし、そして何よりも自分の過去とこれから在ったはずの人生（もう再び手にすることが出来ない）そのものに心が押し潰されていってるのがいつしか耐えられなくなってしまっていた自分がいました。だから縛られない、悔やまない、恨まないようにするために、治安の悪くなった悪霊（注この中には自由に好きなことができていたことも含むそうです。黄泉の国です。）だらけになってしまった自分の心の中に沢山の墓標をたてて静かに供養していきました。それで徐々にあの中で安定したニュートラルな状態の自分を保つことができました。

たとえば致命的な病気とは真っ向勝負はしない方が賢明なんです（精神的な面で）、こういう時は和戦が一番なんです。

大切な事は向き合い方なんですよね。ショックで受けた心の傷はいつになっても消えません、ただそこに傷があることを忘れてしまっているだけなのですから、やはり向き合い方が大切なのだと思います。そこで人が墓というものをつくったことも向き合い方の一つなんじゃないかなと今思いました。

純粋な自分というのは何事にも支配されない、自身が自身の使命（義務）に気づけた時にこそ、（ライフインデキス）言えるのだと思います。これが「知る＝死ぬ」であって、歌手であったら舞台で死にたいとか、武士であったら戦で死ねることが、たとえこれが道半ばであってもそれは本望なんです。そしてこれは決して自分自身を惨めにはさせません！』

＊具体的な実践例などは順次私個人のホームページに掲載していく予定です。
http://www2.plala.or.jp/WANIWANI/index.html

（元小学校教諭　現家庭教師）

☆追記「母国語を習得する」ということも含めて、今回の内容の根底には「継承」ということがあります。そのことについての上原先生の言葉を昭和５９年度の「児童言語」の講義から抜粋します。

「教育者は。『うつろい』をつかまえていないと。・・・文化は継承という役割を果たさなければならないんですよ。・・・各地に芸能保存会なんていうのがある。古い芸能が残っているから保存して次代にうつさなければならない、って。しかし保存することと継承することは一つの概念ではないんです。継承と保存というのは違うんです。保存されただけの文化はもはや文化の遺物にすぎないと私は思うんです。

所詮、人間の命題っていうのはこれ以外ないんですよ。継承以外はありませんよ。すべてがそうです。この役割しかはたさないんですよ、人間っていうのは。いかに譲り受けいかに譲り渡していこうかと……その橋渡しを自分はしていると思う事ですよ。……」

＊平成30年8月、社会人の教え子三人と共に、「駿煌会」を発足。上原先生が歌舞伎を通して日本人の心（心意伝承）について探っていたのと同様に、アニメや理数からそれを探求し、現代人の生き様に反映させていこうというものです。ブログなどもあります。